

令和二年度文部科学大臣賞審査概要

本年度の文部科学大臣賞の選考について、八点に選ばれた候補作から、事前の査読によって、あらかじめ各委員より二点を選ぶことを求めた。その際、順位をつけて著述名の明記とともに、併せて評価の理由書の提出を要請した。この報告書は、審査委員会当日の議論に加えて、事前に提出されていた推薦文をもとにしてたたためるものである。

候補作八点のうち、総じてもつとも評価が高かったのは、松井忍他編著『伊予俳人 栗田樗堂全集』（和泉書院刊）であった。七名の委員のうち、五名が一位に、他の二名も二位に推挙した。すなわち、全委員が高い評価を与えたことになる。当日の発言においても、大臣賞にふさわしいという結論は衆目の一致するところで、異論の得る余地はなかったといえる。その他の候補作については、とくにまとまって高評価を得る著作はなかった。

以下、該当作について、内容の概略と意義・評価について略記する。

栗田樗堂は、寛延二年（一七四九）伊予国松山に生まれ、文化十一年（一八一四）に没す。松山で町方大年寄をつとめるかたわら、蕪村とも交友のあった暁台（名古屋出身、後半生京都で活動）に師事しつつ、全国の俳人と広く俳交をもった。そのなかには、四国に旅をしてまわった一茶の名もある。生涯の俳諧活動のなかでのこした作品は、発句をはじめ、連句・俳文など多数にのぼるが、このたびの集成によって創作の全貌が明らかになった。

蕪村らの天明俳諧以後、上方や江戸以外の地でも俳諧は盛んになってゆく。樗堂は、そうした地方俳壇の牽引者の典型ともいえる人物であるが、従来の俳諧研究では、この時期はほとんど一茶研究に偏っていたといえる。そういうなかで、本書は、樗堂の作品や活動を総合的に理解・研究するために不可欠の基本文献としてたかく評価できる。本文の章立ては、発句篇、連句篇、俳文篇、関係俳書篇、追善篇、書簡篇の六章からなり、さらに詳細な年譜および解説が付される。全体としてきわめて目配りのきいた労作としてよい。

発句篇では、自身の編集した句集が、三篇まるごと紹介されているのが目を引く。ただ、諸本の関係について書誌的分析、および作品の特徴などについて言及があってもよかった。連句・俳文の収録もさることながら、関係俳書・追善集を翻刻した点も、ことに意義深い。また、書簡等において、伊予に杖を引いた一茶との関係にふれている点も意味がある。

理想的ともいえる豊富な内容をもった本書だが、さらにこれを足掛かりにして、江戸後期の俳壇研究を活性化させることが期待できる。余言ながら、松山が近代俳句発祥に大きく関与した土地柄であることを考慮すると、樗堂研究は明治以後にも視野を広げる端緒となりうる。本書をどう生かすかということは、俳諧研究の今後の重要な課題となるだろう。

以上を以て、『伊予俳人 栗田樗堂全集』を文部科学大臣賞に推薦する理由とする。

令和二年八月五日

審査委員長 藤田真一